

ゴッドファーザー、そして、海亀とワルツ

—セブ島 6回目→60日間の『僕の村』—

ISP: (International SCUBA Peasant)

(国際 鈍(どん)百姓 ダイバー)

伊原 昭男



鮫(ネムリブカ)



私の掌に載ったカレイ



色鮮やかなネットイミノタカサゴ



(私の大好きな) カエルアンコウ



アオウミガメ



キングマヅの群れ

6回目の「セブ島・ダイビング」から戻った。

今回は60日間、ほぼ2ヶ月間の滞在で、ダイビングは約120本あまり潜った。

帰国して、安堵感より・・・、今回もまた、胸にポカンと気だるい「穴」が開いている。

もちろん、家族との再会は非常に嬉しいが、『僕の村』の仲間との別れの寂しさは、回を重ねる度に確実に増してくる。

(今回26ページの滞在記録(備忘録)を作成し、千葉高同期の何人かにも送ったが、そこから抜粋して千葉高ホームページ用を作成した。)

[ゴッドファーザー]

フランシス・コッポラ監督、マーロン・ブランド主演の映画、「ゴッドファーザー」のことではない。

今回の滞在期間中に、非常に光栄な役回りとして、カトリック教会での「ビアンカ」ちゃんの洗礼式で、栄誉ある「ゴッドファーザー」の役を務めたのである。

いきさつはこうだ。

まずは、登場人物、「ビービー」を紹介しよう。

今年2月の滞在期間中に、バイクのマフラーで左足ふくらはぎに大火傷を負い、5日間ダイビングが出来なかった。この時、暇を持て余していた私を、毎日バイクで連れ出し、鍾乳洞や秘境の滝巡りなどに連れて行ってくれたのが、非常に面倒見のいい「ビービー」である。

『僕のショップ』の(経営者に次ぐ)No. 2、ドイツ人のスーパーバイザ(店長)、「ハーマン」の奥さんで、3人の男の子のお母さんである。

ビービーはとにかく世話好きで、今年2月私の誕生日パーティでは全てをアレンジしてくれたが、今回の私主催の大パーティでも全てを彼女が取り仕切って準備してくれた。

ビービーについては、今回こんな出来事もあった。

彼女の友達のお姉さんが癌でなくなり、その友達に「埋葬式をするお金が無い」と分かるや、即、発起人となって寄付活動を展開し、2日後には無事埋葬式を実現させたのである。

彼女の行動力にはいつも頭が下がる。(私も少しだが、金銭的に協力させていただいた。)

とにかく働き者で、人のためには労をいとわない、声の大きな、フィリピン版「肝っ玉かあさん」だ。

私を見つけると、いつも、所構わず(街中でも)、大きな声で、「Hello, Akio, My second husband without SEX!」(ハイ、アキオ、セックスをしない、私の2番目の旦那様!)と挨拶してくる。こちらも、恥ずかしがってられないので、「Hi, Bhiebs, My second wife without SEX!」(ハイ、ビービー、セックスをしない、僕の2番目の奥様!)といつも大きな声で答える。

そんなビービーと店長ハーマンに、10月5日、かわいい女の子が生まれたのである。

今回の私のフィリピン入国が10月15日だから、わずか10日前のことである。

4人目の子供にして、初めての女の子で、名前は「ビアンカ・テア」、略して「ビアンカ」である。

私が初めて見たのは到着の翌日で、ビービーの腕に小さな小さなビアンカが抱かれていた。



写真左から:(クン・パレ)ハーマン、(私のゴッドファーザー)ビアンカ
そして(クン・マレ)ビービー

ある日、ビービーと旦那のハーマンが来て、「AKIO、1ヶ月後の11月16日にビアンカの洗礼式をするので、『ゴッドファーザー』になってくれないか?」との相談を受けた。

「私は、仏教徒だよ。カトリックの洗礼式に出られる立場にないよ。」と一度は断った。

すると、「そんなことは関係ない」と言う。

(厳粛なカトリックなのに、この「柔軟性」・「いいかげんさ」がフィリピンの的で、私は大好きだ。)

要は、「信頼のおける人に『ゴッドファーザー』になってもらいたい。」と、言うのだ。

いろいろ詳細を聞いた後、結局、非常に名誉なことでもあるので、ビアンカの「ゴッドファーザー」を引き受けることにした。

ビアンカのゴッドファーザーは結局、私を含め4人である。

- ① ドミニック： スイス人(ルツェルン出身)、私の弟・弟子の一人、通称「ドメ」。
- ② アンディ： スイス人(ルツェルン出身)、ドミニックと一緒に仕事をしている私の弟・弟子。
- ③ エブラハム： 英国人、ダイビングの世界では最高位の資格を持つ達人、略称、「アベー」。
(彼については、後ほど「海亀」の話の中で、詳しく説明したい。 今回の私の宝物だ。)

また、女性の、ゴッドマザーは2人である。

- ① マリー・ジーン： アベーの奥さん。
- ② マルギッド： 『僕のショップ』の向かいのリゾートの経営者。



ゴッドファーザーs(後左からアンディ、アキオ、アベー、ドメ)



ゴッドマザーs(後左からマルギッド、マリー・ジーン)

11月16日、旧KDDの友達が帰国した翌日の日曜日、ビービー&ハーマン夫妻、ビービーのお母さん、4人のゴッドファーザー、2人のゴッドマザーの10人が教会に集まり、ビアンカの洗礼式を受けた。(ドミニックは、前夜に、スイスから駆けつけ、セブ島に到着したばかりである。)

今日から、ビアンカは私のゴッドドーターであり、実父ハーマンと3人のゴッドファーザーを「クン・パレ」(略称、「プレ」と呼び合い、実母ビービーと2人のゴッドマザーに対しては「クン・マレ」と呼び合う、親しい、親戚のような、特別な関係となる。

この日以降、ハーマンには、私は朝の挨拶を「Good morning, Pre !」で通している。

洗礼式を終えて、教会からハーマン宅に戻ると、既に、ビービーの親戚、『僕のショップ』のスタッフたち、近所の人たちが大勢集まっていた。

裕福な家での祝い事は、決まって「レッチョン・バブイ」(豚の姿焼き)である。

今日の主役、ハーマンが豚の背中に、「トンツ」とナイフを入れる。

あとは専門家が解体していく。

こんがりパリッパリッとした焼けた豚の背中の皮にナイフが進むと、パリッ、パリッと、快音が響く。

砕氷船が厚い氷を割りながら進んでいくようだ。

続いて、美味そうな香りが、ふんわりと漂う。いつものレッチョン・バブイのクライマックスである。

[レッチョン・バブイ(豚の丸焼き)]

今回、初めて気付いたのであるが、レッチョン・バブイのパーティは、ついつい招待客が集まる夕方から始まると思っていたが、実は早朝の準備段階から始まっているのだ。

私主催の感謝パーティでも、「18:30から開始」と、スタッフや長期滞在者に声を掛けた。

ところが、主催者として早めに、18:00時にハーマンの家に行くと、既に豚の丸焼きはこんがり焼き上がり、キャラメル色に輝いている。

そのまわりには大勢の人間がたむろしていて、ニッコリ、挨拶をしてくれる。

既にアルコールが入り、みんな出来上がっている様子だ。

この人たちを、ビービーが、「従兄弟」だの、「はとこ」だのと、紹介してくれる。

みんな、豚の丸焼き、開場設営、ビービーの料理作りなどの作業に総動員された親戚たちだ。

男女、7・8人はいる。

「そうっかあ！。申し訳ない。ビービーは僕のパーティのために、こんなに親戚を総動員してくれたんだあ！」と申し訳なく思った。

その後、マニラ出身でカナダに住む、DM候補生、ロッドから初めて話を聞いた。

レッチョン・バブイには、親戚を総動員し、朝早くから、豚を殺し(注意1)、臓物を抜き、お腹に薬草を詰め、丸半日かけて、丸焼きを作る。

それも、炭火の上で(注意2)、30kgもの豚を、両手でグルグル、半日回し続けるのである。

その間、豚のレバー・心臓などの内臓を焼き、みんなで食べながら、飲みながら、しゃべりながら、楽しく集い、そして働くのだそうだ。

「そうっかあ！ そうなんだ！」 家族・親戚の間では、早朝から、パーティが始まっているのである。

親戚同士、協力しながら、助け合いながら、そして親睦を深める、レッチョン・バブイはそんな「一大行事」なのだ。

正に、昔の日本の田舎、結婚式などで、親戚・近所を挙げてのお祝い行事なんだ。

なんて素晴らしいんだろう！

(注意1): [AKIO が死んだ!]

パーティの4日前、日曜日のことである。

ビービーが来て、「これから、出物の多い日曜市場に出かけ、いい豚を仕入れる」と、言った。

(今年2月の私の誕生パーティでは、生きた「豚」と「ヤギ」を買いに、彼女は30km離れた隣町まで行った。)

そして4日後、パーティ当日の朝、ショップで店長のハーマンが開口一番、私に「AKIO が死んだ！」という。

何を言っているのか？ 訳を聴くと、日曜日に買った元気な豚に、家族皆で名前を付け、今朝まで皆で可愛がっていたという。

その豚の名前が「AKIO」だという。丸焼きのため、そのAKIOを今朝殺したのだ。

「そうか、可愛そうな子豚、でも4日間、ハーマン家族が可愛がってくれたというから、成仏しておくれ。」

パーティ開始直前、ハーマンの男の子、6歳の可愛いマチューに、キャラメル色になった美味そうな豚を指差し、「この豚の名前は？」と聞く。マチューは丸い眼でニッコリ笑って、「AKIO！」と答えたのが、忘れられない。

(注意2): [炭火焼き]

後日、DM候補生のロッド(カナダ在住のフィリピン人)が教えてくれたが、カナダでもレッチョン・バブイをやるが、大きなオープンで焼いてしまうとのこと。炭火で半日かけて焼いた、本格的なレッチョン・バブイは、味も香りも比べ物にならないという。もう、カナダではほとんど見られないそうだ。



AKIO と AKIO



ハーマン & ビービー夫妻と

今回の2ヶ月間で、私が主催、あるいは招待を受けたパーティや会食は14・5回あった。そのうち5回は、規模の大きなレッチョン・バブイ(豚の丸焼き)のパーティである。2ヶ月間で、レッチョン・バブイが「5回」というのは、驚きである。というのも、このレッチョン・バブイは、一般的なフィリピン庶民にとって、はなかなか口にできない代物なのだから。洗礼式や結婚式など限られた機会でしか食べられない、一生に何回も食べられない、憧れの、最高の料理なのである。

千葉高の同級生、MASA、TAKA & SETTYのライセンス合格祝いのパーティは、MASAの旅行記に紹介されているので割愛するが、私の感謝パーティの様子を写真とともに紹介しよう。

招待客は、今年2月の誕生日会では『僕のショップ』のスタッフとその家族を中心に招待したが、今回は、ショップのスタッフの他、長期滞在の仲のよい、ドイツ人・フランス人・スイス人たちのお客様を大勢招き、総勢50人弱である。

場所は、前回と同じ、ハーマン／ビービー夫妻の家で、室内と庭とを開放してくれた。

食べ物は、豚の丸焼きのほか、ビービーの手作りで、ビーフのミートローフ、ミートボール、春巻き、ツナサラダ、パイアの酢漬け、などなどである。

パーティでは、とにかく、食べ、飲み、話し、笑い転げるのである。

そのうち、広い庭に椅子とビールケースに腰をかけ、皆で円陣を組んで、ただひたすらビールがなくなるまで飲んでしゃべり続ける。

飲み物はビールだけで、14ダース(168本)を用意したが、これを夜の11時までかけて全てを飲み干したからすごい。

レッチョン・バブイは、こんな雰囲気、耳(これが美味しい!)からトン足まで全てを食べ尽くす。

[ふぐ料理パーティ など]

レッチョン・バブイのほか、珍しいパーティとしては、東工大の後輩TOMOの帰国に合わせて開いた、「ふぐ」料理パーティがある。

ショップのポートマン、アマデオ宅の裏庭で、現地スタッフたちによる男の手作り料理だ。

この時の主人公は、シェフ役の、隣の貸しポート屋のポートマン、「アベヨック」である。

彼は、以前から、「AKIOに、俺の作った「ふぐ料理」を食べさせたい」と言っていた。

また、いつも、「俺のふぐは、いままで何百人という人間が食べているが、誰一人死んだ奴はいない」、と自慢するが、私は「その第1号になりたくないよ。」と、こちらから遠慮させてもらっていた。

今回、TOMOも食べてみたいと言うので、仲間のDM、オースチンに話をもちかけた。

彼は快諾し、すぐにアベヨックを呼び出し、ほかの現地スタッフ5・6人を集めた。

それに、TOMOと私だけが加わった、言わば、内々のパーティである。

いよいよ、料理作りだ。まずは、料理長アベヨックの出番。

海の中でいつも見ている、猛毒の、あの大きな、ふぐ2匹を、アベヨックが見事にさばく。さばき方は、おかあさんから教えてもらったと言う。

次に、ラリーというポートマンは、椰子の実を割り、その核の内壁のココナッツを、ガリガリと削り取り、そこから搾ったココナッツミルクを作る。そこで、アベヨックは、さばいたふぐの身を、そのココナッツミルクで煮込む。「ふぐのココナッツ・ミルク煮込み」だ。

さらに、ライアンというポートマンは、背びれに毒針がいっぱいついた「オニダルマオコゼ」や「カサゴ」を5匹、毒針に注意しながら、次々と刺身におろしていく。となりでライアンの奥さんが、頼もしそうに、安心して見ている。この刺身も、ラリーが搾ったココナッツミルクで和え、「キニラオ(フィリピン風刺身)」を作った。ベテランDMのユーゼルは我々と飲みながら、全体を監視している。

さて、男のふぐ料理が完成した。

これに、炊き立てのご飯を添えて、いよいよ、会食の開始だ。

TOMOが私の耳元でささやく。

「見てください、AKIO。みんな静かですよ、ひとつこともしゃべらない。みんな夢中で食べてますよ。」

「ほんとだあ！確かに！」

あれだけ賑やかだったのに、確かに、みんな、黙々と、ただひたすら食べている。

「よっぽど、美味しいのだ！！うん、美味しい、本当だ！確かに、絶品！非常に美味しい！」

みんなが黙々と食べる理由が分かる。

鍋の中の「ふぐのココナッツ煮込み」が、「おかわり」で、どんどんなくなっていく。

最後に遠慮の塊、「ふぐの頭」が残った。

「AKIO、どうぞ！」とユーゼルに勧められた。

長老の特権で、遠慮なく最後の「頭」をいただく。

これがまた美味しい。骨を分解し、しゃぶり、綺麗に食べた。

ライアンの作った、ココナッツミルク入り刺身、「キニラオ」も美味かった。

みんな、満足した顔をしている。

それから、また、ビールだ。とにかく、ビール。

こんな調子で、夜中まで飲んだ。

この他、地元スタッフばかりを、レンストランに招待した「小パーティ」は何度もある。中でも、夜のパーティに参加できない、ショップの「女性スタッフ」だけを招き、昼食会もやった。これがまた好評で、みんなから感謝された。

などなど、今回はパーティづくりの滞在であった。名目があろうと、なかろうと、現地スタッフ仲間を招待し、一緒に飲む機会を多くした。

その他、経営者宅やスタッフ宅など、こちらが招待を受けたパーティや夕食会も多い。千葉高同級生のHIROが滞在中に、二人で招待を受けた、ドイツ人経営者カール宅での夕食会では、広い芝生の上で、海を見渡す素晴らしい眺望を背景に、かなり凝った様々なドイツ料理、ドイツビール、ブランディ、アニス酒などが振舞われた。昔懐かしい本格的ヨーロッパの食事会であった。

また、ハーマン宅の夕食会は、ご主人のハーマンがドイツ人なので、ビービーが工夫して肉類を中心にしたフィリピン料理が出されることが多い。

さらに、私のDMの先生、ディノの家に呼ばれる時は、いつも、突然、「今日、いいツナ(注意)が手に入った。刺身にするから、食事に来ないか?」と、声がかかる。

夕方、所謂「Deco ビール」(後述)を飲んでいる最中に声がかかることもある。

ディノの夢は、自分の家の隣に小さなカランドリア(大衆食堂)を出すことだ。

(隣の用地は既に関済済みである。)

そこで、ディノへの土産は、前回は刺身用「柳場包丁」、今回は魚をおろす「出刃包丁」と日本式「砥石」とをプレゼントした。

自分が刺身を食べたくなると、必ず私だけをこっそり招待して、私に刺身を切らせ、「切り方」を学ぼうとする

(注意):[ツナ]

「ツナ」とは、本来「サバ科」全体を指す呼び名で、マグロのことではない。この地方で「ツナ」と言うと、日本の「かつお」であることが多い。「おおっ! マグロの刺身か!」と期待したら、ガッカリする。

[Deco(減圧症回復)ビール]

ダイビングが終わって、16:30頃になると、『僕のショップ』では、ビールが、どこからともなく、ドカン、ドカンと、2ダース単位(「one case of beer」と言う)で出てくる。

しかも、ほぼ毎夕である。

これは、『僕のショップ』だけの特徴で、他のショップでは見たことがない。

『僕のショップ』だけが、外が真っ暗になるまで、ショップのシャッターが降ろされても、店の前に椅子とテーブルを出し、大勢が飲み続けている。

話は反れるが、このビールがなくなると、私の場合、そのままスタッフや長期滞在者を誘って、うちのボートマン「アマデオ」が経営する小さな雑貨屋の「軒先」にテーブルを置いただけの場所に移る。

これを私は「アマデオ・レストラン」と呼んでいる。

「アマデオ! 今日もアマデオ・レストランに行くから、テーブルを出しておいてくれ。」と頼む。

アマデオの雑貨屋から120円の1リットル瓶ビールを数本買い、隣の屋台からBBQを買ってきて、目の前を通り過ぎる通行人を見ながら、時には彼らに声を掛けながら、ショップ仲間と、「アマデオ・レストラン」で飲む。

さて、このなぞのビールを、我々は Deco Beer (Decompression Beer: 減圧症回復ビール)と呼ぶ。そもそも、ビールに、恐ろしいダイビング事故、「減圧症」を回復する効果なんぞ、ある訳がない。ただ、飲む口実に、「Decompression」(減圧症回復)と称しているだけである。

このビールのスポンサーは、何のことはない、我々や長期滞在のお客様たちである。

(時々『僕のショップ』が提供することもある。)

もちろん私も、何度も、何度も、多分10回以上は、このビール提供に貢献している。

といっても、2ダースで1000円そこそこの値段だから、1本40円チョイである。

(参考: 同じものが日本人リゾートでは 1本600~800円もする。)

これで、みんなが楽しめるのなら、喜んで提供する。

このビールの「提供」に際しては、『僕のショップ』特有の、「ルール」がある。

まずは、ポジティブなルール、積極的で、嬉しい、名誉な「提供」である。

例えば、10m余りもあるジンベイザメに出くわした、ダイビングの初心者や中級者ライセンスに合格した、ダイビング本数が100本や200本に到達した、などなど、嬉しい、めでたい時に「喜び」と共に寄付をする、「one case of beer」(ビール24本)である。

これは、喜んで、自分から寄付を出したくなる、名誉な「ルール」である。

(MASA、TAKA&SETTYの初級者ライセンスの合格祝いには、これに、さらに張り込んで、レッチョン・バブイのパーティをやった。)

次に、ネガティブなルール、「ペナルティ」として、の提供がある。

ボートの出帆時刻に遅れた(注意1)、ウェイトを忘れて、全員が乗船しているボートを岸まで戻した(注意2)等々、人に迷惑をかけた時の不名誉な「one case of beer」である。

(注意1): [ボートに遅刻]

私自身、ある時、ボートに遅れそうになった。雰囲気を感じたので、誰かが「one case of beer」と叫ぶ前に、「何でスケジュールより先に出発するのだあ！ まだ1分あるじゃあないか！ ここはフィリピンだろう?!」と叫んだ。

この一言で、みんなが爆笑した。

すると、DMのオースティンが「お客さんがドイツ人ばかりだからね。」と答えたので、さらに爆笑の輪が拡がり、「one case of beer」の件はどこかに吹っ飛んでしまった。

それにしても、オースティンは「ウイット」に富んだ、いい受け答えをする。頭がいい。

(注意2): [ボートを岸に戻す]

これを、正に、僕の友達がやってしまった。「ウェイト」をショップに忘れて乗船してしまったのだ。

すぐボートマンに叫んだが、もう遅い。いかだを上げ、向きを変えたボートを、また岸に戻すことになってしまった。

(実はこの友達、その前日も遅刻しそうになり、ウェットスーツを持って乗り込み、ボートの中で着替えてもらった経緯がある。それを、みんなが見ていたのだ。)

この時、ひょうきん者のDM、オースティンが大声で笑ったのが、今でも面白く思い出される。

「 OK, OK, No problem at all !!. Everybody is happy. Yesterday, it was incomplete! Today, it's COMPLETE !!
Everybody's happy. No problem at all !!」

(全然、問題ないよ。みんなハッピーなんだから。昨日は不完全だったけど、今日は「完璧」だね。みんなハッピーだよ。)と、大声で笑い転げたのである。

もちろん、その友達は不名誉な「one case of beer」を提供したばかりでなく、さらに日本からの美味しい日本酒をも、みんなに振舞った。立派！！

[私自身の大失敗]

私が、ある女性ダイバーをガイドしていた時のことである。その女性は「耳抜き」が出来なくて、なかなか深く潜れない。この日の視界はイマイチ。ゆっくり、ゆっくり潜行しては、また浮上し、これを繰り返していたら、みんなから出遅れてしまった。そのうち、みんなが見えなくなり、我々二人は完全にグループに「置いてけぼり」を食らい、孤立してしまったのだ。さらに、潮が換わり、逆潮に転じたのだ。我々のボートのリーダー役、ベテランDM、ユーゼルの潮の読み間違いである。

(こんなことはよくある。こんな時のために、(俺と言う)、ガイドが付いているのだ。)

偶然にも、足元深く、反対側から、遅れてエントリしたハーマンのドイツ人一行が、順潮に乗って流れてくるのではないかと。見るからに楽しそうである。そこで、DMの私は考えた、「このまま潮に逆らって進んだら、この女性の力量では、体力を消耗し、彼女はエア切れを起こしてしまう。ここは絶対、『安全第一』だ！ お客様の安全のため向きを換えるぞ！」

こう決断した私は、ハーマンと同じ方向、すなわち「戻る方向」に進路を変更した。

ダイビングを終了し、水面上がったら、当然、我々のボートはいない。遥かかなたで、われわれのグループをピックアップしている。近くにいるハーマンが、「AKIO、こっちのボートに乗れ！」と手招きするので、彼女といっしょに、ハーマンのボートに上がった。

そのうち、遠くのわれわれのボートが、我々のピックアップのために向かって来た。実は、私が、遠くからでもよく見える風船「フロート」を水中から上げたのだ。我々のボートマン、アマデオは非常に目がいい、一流ボートマンである。アマデオは、側まで来てハーマンのボートに我々が乗船しているのを確認すると、向きを換え、2隻のボートが並んで平行運航になった。

この時である！ 私のDMの先生、ディノが、「AKIO, One case of BEER !!」と、大声で、叫んだのだ。両方のボートで爆笑となった。もう、しようがない。みんなの前で、先に言われてしまった方が負けである。

ショップに戻り、ディノに、そして「周り」にも聞こえるように、大声で、笑いながら抗議した、「ディノ、あんたが、お客様の命が一番大事だと教えてくれたんじゃないか。おれはあんたが教えたとおり、日本人女性の命を救ったんだぜ。One case of beer はひどいよ。まあ、・・・喜んで出すけどね。」と。場の雰囲気壊さないために、不名誉な寄付はしたが、いまでもあの決断は正しかったと思っている。

決定的な、私の不名誉な One case of beer は、ウェイトをつけずに水に飛び込んでしまったことだ。このときは、弁解の余地はなく、気持ちよく寄付を出した。

ところが、ところが、これ以外にも、実は、もっと大きな失敗を、今回、やっている。恥ずかしながら、ここに紹介しよう。

実は、実は、ウェイトなしに、しかも「それに気付かず」、そのまま60分間、潜り続けたのである。

これは、DMとして、まったく「あるまじき」行為である。

ダイビングは10mも潜ると、ウェイトを感じなくなる。 エントリ後に、フィンで、一気に深く潜ってしまうとウェイトがないことに気付かないのである。

しかし、問題は、ダイビングの後半で、10m以下の浅場にきた時である。 身体が浮いてしまってどうしようもないのだ。

水中深いところに長居した身体は、水面まで急浮上すると、間違いなく「減圧症」になる。

これを回避するため、ダイビングの最後は、「セーフティ・ストップ」と言って、減圧症にならないように、水深5mで3分以上、通常は5分間、休むことになっているのだ。

この水深5mでの3分間、否そのときは5分間が、文字通り「地獄」であった。

とにかく、深く息を吸うことが出来ないのだ。 息を深く吸い込むと身体が急に浮き上がる。

さらに、身体が浮いてしまうので、「逆立ち」状態になり、上向きにキックし続けるのである。

「浅い呼吸」の連続、かつ「逆立ち」状態でキック、運動が激しく、酸素が必要だ。

でも深く吸えない。 これを5分間以上続けたのだから、正に地獄であった。

この話は、DMとして、誰にも言えなかった。 ただ自分の友達とフランス人DM女性に話したら、「なんとまあ、DMにあるまじき行為。 でも、流石、本物のDMだ。 素晴らしい。 私にはできない。」と、けなされ、そして、褒められた。

もちろん、自分でも、DMとしての「自信」を強めた一件である。

なんせ、『ウェイトなしで、60分間』、潜り続けたんだからね。

[海亀とワルツ]

『僕のショップ』には、エブラハムという英国人がいる。 通称、「アベー」だ。

以前は、他のショップにいたが、最近、『僕のショップ』の専属になった。

ハーマンの子供、ビアンカちゃんの洗礼式での、4人のゴッドファーザーの一人である。

アベーは、ダイビングの世界で最高位のライセンスを持っている。

「コース・ダイレクター」という資格である。

ドイツ人経営者のカールでも上から2番目のライセンス、「マスター・インストラクター」なのだ。

ダイビングの世界には、ある種、軍隊のような階級があり、かなり心理的な序列がある。

私なんぞは、「プロ」と言っても将校なりたての青二才で、少尉？、あるいは今回かなり実践を積んだので、せいぜい中尉程度だろう。

アベーは、中将・大将クラスである。 彼の発言には重みがある。

アベーは12歳から潜っていて、『僕の村』でも、彼の発言に逆らえるものはいない。

実は、『僕の村』には、アベーのほかにもうひとり、「マリオ」というフィリピン人のコース・ダイレクターがいた。

マリオは、今年になって、高給に惹かれて、中東のドバイに移ってしまった。

したがって、今は、『僕の村』に、コースダイレクターは、アベーひとりだけである。

ある時、水の中でお客さんをガイドしていると、アベーがの訓練生を連れてるのが見えた。

よく見ると、2人の間に海亀が居て、アベーがその海亀に餌をあげているではないか！

これには、驚いた！

水族館じゃあないぞー、ここは！！
いったいどういうことだ！
野生の亀がアベーの手から餌を食べているのだ！

普通、海亀は人が来ると怖がって逃げてしまう。
大自然の中で、野生の海亀が人から餌をもらうなんぞ見たことがない。

ショップに上がり、着替えて、とにかく、アベーの元に走った。
そして、アベーに、矢継ぎ早に、いくつも質問をした。
「アベー、今日は実に感激した。 あんな光景は初めてだ。 アベー、是非教えてほしい。
アベー、あの亀はなぜ君の手から餌を食べるんだ？ いつから食べるようになったのか？
アベー、あの餌は何だ？ どこに生えている？
アベー、我々が近づいて亀が逃げたあと、君は、「亀が戻ってくるから待て」と、サインを出した。 なぜ
亀が戻ってくることが分かったのか？」

海亀を挟んだ、彼との付き合いは、このようにして始まった。 アベーに質問を浴びせたのだ。
今思っても、あのときの興奮は忘れられない、今でも胸が熱くなり躍る思いだった。
彼も、私の意欲に、面食らったのだろう。「まあ、落ち着け」と言わんばかりに、両手を上下に振り、ゆ
っくり、そして丁寧に話を始めてくれた。

『僕のショップ』の近海には約20匹くらいの海亀がいる。 アベーが餌付けをしていたのは80歳くらい
のおじいちゃん亀だ。他に、少し小柄な70歳くらいのあばあちゃん亀も餌付けをしている。 亀は10
0歳過ぎまで生きることが出来る。 アベーは全ての亀を把握していて、甲羅の特徴などから、みんな
に名前をつけている。 また亀には個性があって、一匹一匹性格が違う。 数年前までは全ての亀が
近づくと逃げた。 餌付けが出来るようになったのは何年も努力を重ねたからだ。 まず、「餌が何か」
をつきとめるのに何ヶ月もかかった。 本やインターネットでも調べたが、本に出ている海草はこの辺
には生えていない。 そこで、亀を追いながら、エアの続く限りもぐり、一ダイブ3時間もかけて、何の
「餌」を食べているのか、探し回った。

(亀の生息深度は深くない、したがってアベー程の力量があれば、3時間潜っていられる。)
その結果、ついに海亀の餌を見つけた。 ガラス繊維がいっぱい、信じられないようなスポンジ(海
綿)である。 あんなものどこに栄養があるのか分からない。 そんなグラスファイバーのようなスポ
ンジだ。 そのスポンジの生息場所(省略)も見つけた。
海亀は目が良く見えない、しかし嗅覚が非常にいいようだ。 そのスポンジの生息場所には必ずもど
ってくる。 などなど、いろいろ話を聞いたのである。

アベーの話を聞いて、海亀に対して、今までの自分が、非常に恥ずかしく、申し訳なく思った。
今まで、私にとっては、海亀はただの亀で、一般ツーリストと同じで、どの亀も同じ亀であった。
ただ、悠々と泳ぎ、見ていて「癒し」そのものを感じる、あの「優雅さ」を秘めた、普通の亀だった。

アベーの話以降、海亀に会うたびに、特に老亀に会うたびに、どこのポイントで何をしていたか、何を
食べていたかなどの情報を、常にアベーに報告した。

それを見ていた他のDMたちも、ついに、「AKIOの友達のあの亀があそこにいたよ。」と、私に報告をしてくれるようになった。

アベーの教えを受けて、海亀に会った時、(そして回りにマナーの悪い客や初心者がいない時)、そつと近づき、手を出し、亀の「前ヒレ」を私の「掌」に載せる。

亀は、嫌がらず、両ヒレを私の掌に預け、二人でワルツを踊るのだ。

ああ、夢のような社交ダンス。相手は野生の海亀だぞ。

私は自分の呼吸を慎重に調整し、中性浮力を充分保って、決して亀に体重をかけけない。

プロならではの、抜群の中性浮力、バランス調整スキルを発揮するのである。

亀の両ヒレを私の掌に載せたまま、二人は空間に浮いたまま、その場で、ゆっくり「スピン」を描く。

亀は私の左手首に巻いたダイブコンピュータを、軽く食む。

餌かどうか見極めているのだ。そしてまた私のワルツのリードに身を任せる。

まるで、まるで、夢のワルツだ。

周りで、お客さんや、そしてDMまでが、驚いて、じっと見つめているのがわかる。

今回、おじいちゃん亀と3回、おばあちゃん亀とは1回、私はワルツを踊った。

ある時、経験の浅いお客さんが、亀に触ろうと追いかけた。

すると目の悪い、おばあちゃん亀は恐怖の余り逃げ、方向を間違えて、そのまま鼻から岩に激突してしまった。

この件をアベーに報告した時、アベーが、肩をすくめ、大きく顔をゆがめた。

私はその一件以来、未経験のダイバーやマナーの悪いダイバーを連れていた時は、例え穴の中やテーブル珊瑚の下に、『ぼくのお友達』を見つけても、素通りすることにした。

ところで、前述の「Deco ビール」のルールに、ジンベイザメや海亀に触ったら、「one case of beer」というのがある。

ある時、ディノが、私と海亀のダンスを見て、「AKIO、one case of beer だろう！」と言った。

私は、「あれは違う、アベーに教えてもらい、俺も充分勉強をして、注意深く触れているのだ。」と返事をしたら、それ以降、彼をはじめ、誰も文句は言わなくなった。

『アベーの威光はすごい！！』。

今では、アベーと私、二人だけの、海亀との触れ合いだ。

海亀は、爬虫類である。魚と違って「肺呼吸」をしている。

したがって、20分-30分ごとに水面に上がり、空気を吸わないと「溺れる」のである。

(ウミヘビや 哺乳類の鯨やイルカも同じである。)

だから、海亀は、水中で身体が拘束される、あるいは拘束されそうな体勢になるのを、本能的に恐れ、非常に怖がって、パニックに陥るのである。

身体の一部をつかまれたり、上から押えられたりすると、恐怖で逃げ惑うのである。

近所の韓国人ショップの入り口に、韓国人ダイバーが海亀の背中にぶら下がっている写真を、堂々と掲示してある。これなんぞ、とんでもない暴挙である。

素人ダイバーは海亀を見つけると、間違いなく、自分も同じような写真を撮ろうとするから。

海亀はつかんではいけない。したがって、前ヒレも掌に載せるだけ。親指で挟みたくなるが、挟んだ瞬間に、海亀は前ヒレを放そうと「もがく」のだ。海亀の背中にも触れてはいけない。上から押えら

れると空気を吸いに上がれないと、思い、もがく。下から触られる分には、岩の上に居るのと同じで、いつでも空気を吸いに行けるので安心する。

アベーとの親交はこうして深まり、海亀を挟んで友情が芽生えたのである。。アベーは、最後に、「AKIOが、海亀にこんなに興味を示してくれるとは思っていなかった。とても嬉しいよ。次回、また来たときには、二人でさらに情報交換をして、もっと海亀について調べよう」、と言ってくれたことが嬉しかった。あの「コース・ダイレクター」に、一目置いてもらったのだ。



①前ヒレを親指で挟んではいけない。



②海亀は私のリードに身を任せ、ゆっくりスピンを回る。

[アロヨ大統領]

去年の9月、私がDMを取得して帰国した後の11月、現職のフィリピン女性大統領、アロヨ大統領が『僕の村』に来たそうだ。目的は？

「ダイビング!!!」

フィリピンには7000もの島がある中で、セブ島、しかもこの『僕の村』が選ばれて、現職の大統領家族がダイビングをしたのだ。

アベーは国籍が英国なので呼びがかからなかったが、アロヨ大統領自身に対しては、もう一人のフィリピン人のコースダイレクター、「マリオ」がガイドを努めた。

そして、そのほかの家族に対しては、『僕のショップ』のフィリピン国籍を持つスタッフがほとんど狩り出されたのだ。アロヨの娘にはディノのお母さん「リンディ」が、男性家族には「ディノ」が選ばれ、ガイドを努めた。『僕のショップ』にとっては、「名誉」この上ない出来事であった。

この大統領のダイビングでは、『僕の村』全体をダイビング禁止区域に指定し、沖には何隻もの駆逐艦を配備して周りを固め、海軍のダイバーが周辺に潜り、空軍のヘリコプターが機関銃を下に向けて上空を旋回するなか、2日に亘って、ダイビングを楽しんだというから、・・・すごい。

日本なら、総理大臣が、戦車や装甲車に囲まれて、富士登山するようなものかと思った。

しかし、現職の総理大臣が、こんなことをしたら面白いだろうなあ。

間違いなく、「公私混同」とマスコミに叩かれることだろう。

ところで、この一件で、『僕の村』、『僕のショップ』がフィリピンで有名になったのか？
今回の私の滞在期間中に、「国会議員が9名潜りに来るようになった」というのである。
ディノから「AKIOも身体を開けといてくれ」と言われ、「俺はフィリピン国籍じゃあないよ」と、断った。
ディノは「相手は大統領じゃあない、ただの国会議員たちだから大丈夫。」という。
「ほんまかいなあ」と思っていたら、議員連中が、急にドタキャンをやった。
「ふん！、どこの議員も同じか！」
でも、フィリピン議員を日本人がガイドしたら、おもしろかったらなあ、惜しいことをした。
後で、残念に思えてきた。

[日本人と水中カメラ]

水中カメラの性能をウンヌンするつもりはない。
水中カメラを持つ上でのマナーおよびその力量について、一言記したい。
一般的に、日本人、韓国人のダイバーは、技術が低く、マナーも悪くて、評判が悪い。
この原因の一部が、「水中カメラ」であることを、今回突き止めた。

正直に言おう。
今回の、私の、複数の友達に対して、強烈なクレームが飛んできた。
それも、震源地が、小うるさいドイツ人のおばあさんばかりでなかった。
他の震源地からのクレームも、DM仲間を通して、DMの私に来るのだ。
対象者は一人ではない、複数のグループだ。
私の友達が、そこら辺の、教養のない、おっちゃんなら、クレームも致し方ない。
しかし、今回の、私の友達は、すべて、立派な、教養ある、善良な、紳士・淑女であり、地上での立ち居振舞いやマナーは完璧な人たちである。

なんで、そんな立派な人たちが、水の中でクレームの対象になるのか！！

一つは、中性浮力が取れていないこと。
もう少し正確に言うと、中性浮力が取れていない事実を、本人が自覚していないこと。
さらに言うと、日本人DMが今まで誰も、彼らに「注意してこなかった」という事実だ。
これには驚いた。
日本のショップは、お客さんに、だーれも注意しないのだ。
だから、ご当人はそれでいいものと思いついてきたのである。
エア消費量が多いお客さんは、中性浮力を直せば、たちまちエアが持続するようになる。
日本のショップは、お客さんの回転率を高めるために、エア消費の多いお客様は「大歓迎」なのだ。
その客を口実にして、ダイビング時間を短く打ち切り、ダイバー全員を早く上げて、次の客に対応することが出来る。
だから、ショップは中世浮力を徹底的に改善しようとしなくていいのだ。
これを解消するには、本人が、水の中で中性浮力を、四六時中、意識するしかない。
間違った中性浮力に慣れて来たものを、いまから矯正するには、本人の自覚と更なる経験が必要である。

もう一つの理由、それが「水中カメラ」である。

これも中性浮力が絡む話である。

中性浮力が取れていないのに、カメラに夢中になり、フィンで珊瑚を蹴っているのに、そのまま蹴り続けているのである。

珊瑚は、生長が早いエダ珊瑚でさえ、1cm伸びるのに、100年かかる。

それをボキボキ折り続けるのである。

この現場は、私も何度か目にしたが、本人は全く気付いていない。

(ゴルフで言うと、グリーン上で、ボールとホールを結ぶ、他人の「ライン」を踏み付け、それに気付かないばかりか、さらにその場で「足踏み」をしているようなものである。

「おまえ、わざとやってるんかあ？ 俺に恨みでもあるんかあ？」と言いたくなるような状況を想像してほしい。)

友達が帰ったあと、ショップでもいろいろ話し合った。

「日本人はカメラを持つのが早すぎる」と言う意見があった。

まさに、これだ！

日本人はお金持ちなので、すぐに「水中カメラ」を買う。

ダイビングの安全を考えるのなら、まず最初に購入すべきは、「ダイブ・コンピュータ」である。

次に、「ダイビング器材やウェットスーツ」だ。

そして、水中カメラは中性浮力が取れるようになってから買うのが好ましい。

私自身、水中カメラを手にしたのは、100本を越えてからである。

自分でコントロールして中性浮力を保ち、空間に自分の身体を、「固定」させられるようになって始めて、珊瑚を壊すことなく、カメラのシャッターが切れるのである。

千葉高同級生のMASAの旅行記の最後に、「次回は、水中カメラを買って、海の中の写真を撮りたい。」との一節があった、……。

うーん、正直言って、「ぞーっ」とした。

「MASA、水中カメラは、もう少し「後」にしないか??」

[日本人ショップのモンキー・ビジネス]

そもそも『僕の村』には、村全体を見渡しても、日本からのお客様が少ない。

たまに来て、そのほとんどは、セブ島空港近くの日本人の「巨大リゾート」から、日帰りあるいは1泊2日の「オプション・ツアー」でやって来る団体ツアー客の一部だ。

だから、彼らが『僕の村』に長期滞在することはない。

また、この手の客は、『僕のショップ』には、まずやって来ない。

ほとんどの客は、『僕のショップ』と異なる、日本人経営の某ショップを利用している。

ショップとしての設備が悪く、飲み水やシャワーすらないし、料金は何かと割り増し料を取る、悪どい、汚いビジネスをやっている。

なぜあんなショップを使っているのか理解できない。

私はそんな日本人のショップには近づかないようにしている。

日本人ショップの方から見ると、日本人ツアー客は「お盆」や「正月」に集中してやって来る、また2度と来ることのない、超・短期滞在の「一見さん」たちが相手なので、サービスは悪くても平気だ、とっているのだろう。ビジネスは、自然と、汚くなる。

『僕のショップ』の仲間は、この種の汚いビジネスを、「モンキー・ビジネス」と言って軽蔑している。

また、日本人客の方も、経験が浅く、技術レベルが低くて、水中のマナーも悪い客が多い。

『僕のショップ』に来るお客さんは、ヨーロッパからのリピータが多く、それも長期滞在のお客様が中心なので、ダイビング技術は、たとえ年配の女性であっても、遥かに、遥かに、上手である。

したがって、客層が異なる『僕のショップ』のビジネスは、長期滞在型 & リピータ客のお陰で、安定している。今回の滞在期間中も、シーズンオフなのに、『僕のショップ』では、ほぼ毎日ボート2隻をフル回転していたが、日本人ショップのボートはほとんど毎日ブイに繋がれたままであった。盆と正月以外は客がいないのだ。

「あれじゃあ、悪どいビジネスをやらないと、食って行けないだろう。」

そもそも、長期休暇が取れない日本人にとっては、『僕の村』での、「のんびり、ゆったり型」のダイビングは、社会システムとして無理なのかも知れない。

『僕の村』にアメリカ人が非常に少ないのも、同じ競争社会システムによるためだ。

かつて、ドイツの会社に勤めていたドイツ人の友達と、今回久々に会ったが、アメリカの会社に移った彼は、「もう長期休暇なんて、全く望めなくなってしまった。」と、非常にボヤいていた。

[終わりに]

今回は、千葉高同級生3組、東工大の後輩、旧KDDの友達など、合計5組7名が来てくれた。

そして、全員の方に、心底満足していただき、『僕の村』の素晴らしさが、私の単なる「独りよがり」や「自己満足」だけでなかったことが証明されて、非常に嬉しく思った。

さらに、ほとんどの方がこの『僕の村』を、私同様、大切に思ってくれて、「AKIO、やっぱり、この村は日本人ツアーの俗化から守るため、地名は内緒にしておきたいね。」と、皆さんの方から言っていたのが、何より嬉しい。

まずは、そのことに、お礼を申し上げたい。

次に、

アベーとの会話で、彼の、こんな面白い話を聞いた。

「昔、子供の頃、他人の庭に入り込み、木に登って、りんごを盗んだことがある。

それを仲間と食べて家に帰ったら、いきなり、親父に、頭をぶん撲られた。

『他人のうちのりんごを盗むんじゃあない!』と。

自分が帰宅するよりも、先に、親父の耳に噂が伝わっているのだ。

若い時は、そんなイギリスの閉鎖的な田舎社会が、嫌で、嫌で、たまらなかった。

でも、今は、そんな田舎社会が大好きだ。正に、この村がそうだ。
誰がなにをしたか、翌日にはみんなが知っている。
よそ者が来るとすぐ分かるし、みんなの目が光っている。
だから非常に治安がいい。」

まったく、同じようなことを、千葉高同級生のHIROも言っていた。
「この『僕の村』は本当に治安がいいことがすぐ分かる。犯罪は起こらないね。
お互いみんなで声を掛け合い、みんなで村を守っているから。」と。

『僕の村』をプラプラ歩いていると、どこからともなく、あっちこっちから、「AKIO！」と声がかかる。
私が知らない人間までが、私の名前を知っていて、とにかく、声を掛けてくるのだ。
レストランに入っても、新人のウェイトレスが、「AKIO、何にしますか？」と、聞いてくる。
「待ってくれよ。私の名前を誰に聞いた？」
すると、「ローウィからよ。」と、言う。
「えっ、ローウィ？ 彼には、今回まだ会ってないよ。」
「そう？ でも、ローウィは、AKIOが来ていることを知っているわ。」てな具合である。

私主催のレッチョン・バブイの感謝パーティを4・5日後に開くことも、ほとんどの人が知っていた。
Tシャツの売り子までが、「AKIO、レッチョン・パーティを開くらしいね。」(私を呼んでくれないの?)って
な目で訴える。
ビアンカの洗礼式で、私が「ゴッドファーザー」を務めることは、数週間も前から、マッサージのおば
ちゃんやトライシクルの運転手までが知っていた。
みんなが、お互いに、みんなを見ている社会、なにをしても翌日はみんなが知っている。
窮屈な面もあるが、だからこそ、「治安」がいい。
村人同士が声を掛け合う社会、安全な社会、そんな田舎社会が大好きだ。

フィリピンと言えば、「治安が悪い国」と、思いこんでいる日本人が多い。
何を隠そう、私も、その一人だった。
でも、『僕の村』は違う。本当に治安がいい。
だからこそ、30～35時間もかけて、遠いヨーロッパから、しかも長期滞在の人間が、大勢やってくる
のだ。

小さな、小さな、『僕の村』の中で、・・・
ビービーは、「AKIO は、もう家族だから」、「AKIO は、他の日本人ツアー客と違って、紳士だから」、
「AKIO は、私の誇りだから」と、いつも言ってくれる。
個人的にも、日本人の名誉挽回として、この言葉に恥じないようにしなくてはならない。
ハーマンは、私を人に紹介する時、「AKIO はインテリだ。日本人がフランス語をしゃべるなんて、誰
が想像する？」と、付け加えるものだから、相手がフランス人の場合、その後、機関銃のようなフラン
ス語が飛んでくる。
ディノも、「AKIO は、英語とフランス語、それに少しドイツ語もしゃべる。『だから』、偉い！」と言う。
(そんなことより、自分としては、未練はないけど、電気通信エンジニアであることの方を上げてほ
しいと、思うのだが、この小さな世間様は、そんな電気通信なんてものには全く関心がない。)

こんな、小さな、狭い、素朴な、『僕の村』だ。

なぜ、いつも『僕の村』に来るのかと、人に聞かれると、私なりに5つの理由をあげる。

- ① 非常に治安がいい。 だからこそ、遠いヨーロッパからリピーターが絶えない。
- ② 物価が安い。 スタッフを招待したり、パーティを開いても、東京で飲むより遥かに安い。
私のホテルは1泊10ドルだ。
- ③ 水がきれいで、魚が多い。 伊豆や千葉の海では、魚を「さがす」のだ。
- ④ ダイビングが便利で、楽。 目の前からボートが出る、すべてのポイントが30分以内、1ダイブごとにショップに戻るので着替えや飲み水をボートに持ち込む必要がない、などなど。
- ⑤ そして第5番目、実は、私としては、これが「第1番」の理由である。
とにかく、心が通じる「仲間」が居て、素晴らしい「仲間」に囲まれ、親切的な「仲間」で溢れているのだ。 よその場所に行って、「自己紹介」から始めたくない。

世界には、もっともっと素晴らしい「村」があるだろう。

ダイビング・ポイントとして、もっと迫力のある「ポイント」があるだろう。

しかし、今までの、私の狭い経験の中では、ここが最高の「村」で、最高の「ポイント」だ。

この周りとの人間関係、築いた信頼関係、高めた友情を、さらに大切に深めたいと思っている。

さあ、次はいつ行こうかな？

私は「鈍(どん)・百姓」(注意)だから、農閑期しか動けない。

「筍」掘りが始まる前には帰国したいので、2月中旬から1ヶ月間くらい行ってこようかと、思っている。

今度は、また家内も連れて行きたい。 家内にとっては、今度で3度目だ。

私の誕生日も含まれるので、それに名目を借りて、『僕のショップ』のスタッフはもとより、その子供を含めた家族全員を招待したいと思っている。

(注意) [鈍・百姓: International Scuba Peasant]

モンゴルから来たアメリカ人女性弁護士、ルシアは、私の[International Scuba Peasant] (訳して、「国際鈍百姓ダイバー」)の名刺を、ひどく気に入ってくれた。

あんなに、極端に、気に入ってくれた人は珍しい。

彼女は首都ウランバートルで、今流行の国際企業合併(M&A)の仕事に忙殺され、死ぬほど忙しいそうだ。

本当に死んでしまう前に、すべてを放り出し、とにかくいつもの『僕の村』に1週間潜りに来たのである。

私の名刺を見て、自分の境遇に照らし合わせ、何か感銘を受けたのだろう。

とにかく、非常にうれしそうに、熱心に名刺に見入り、考え込み、そして気に入ってくれた。

60歳くらいの超・多忙のベテラン弁護士である。)

みなさん、2月末(2/28)の誕生日には、またレッチョン・バブイ(豚の丸焼き)をするつもりです。

みなさんも、炭火で焼いた、本格的「レッチョン・バブイ」を一緒に召し上がりませんか？

『僕の村』に興味がある人は、是非ご連絡ください。